
世界を越えし男と数の子たち

ココノエ・ヴァーミリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を越えし男と数の子たち

【Nコード】

N8263Z

【作者名】

ココノエ・ヴァーミリオン

【あらすじ】

俺はこの日、掛け替えの無い奴らに出会った。

俺は車に跳ねられて死んだと思ったら、なんかよく分からんが別世界に行ってしまったみたいだ。

気が付けば、マッドな科学者や12人の姉妹と暮らしていたり、組織にケンカ売って犯罪者になっちゃったり。平凡な日々を送っていたり

そして - -俺は戦う。ナンバーズ達を、世界を守るために。

プロローグ（前書き）

ココノエです。

初投稿なのでうまく出来ているか分かりませんが、頑張っ
て面白く書いて行こうと思います。

プロローグ

夜の街を歩いている上下黒い服を着て赤いジャケットを着た男がいた。

秋の冷たい風が男に強く当たっている。

????「秋

とはいえ結構寒くなってきたな。」独りそう呟きながら、上着のポケットに手を入れた。

男がポケットから取り出したのは、赤い、宝石のような石だった。

????「あれからもう半年か……」

赤い石を見て、彼は半年前の事を思い出していた。

半年前、彼：五十嵐優斗の家族は、居眠り運転による信号無視の車との衝突事故で亡くしてしまっているのだった。

彼の持っている赤い石は、彼の妹の沙耶に貰った物だった。

ユウト「そっぴゃあ、明日はサヤの誕生日だったな。墓参りに行かないと、父さんと母さんの分も何かお供え物でも持って行ってやるかな。」そう考えながら、青になった信号を渡った。信号の真ん中あたりで、同じ信号を渡っていた人達が自分の右側を見て何かを叫んでいる。

右側を見ると、大きいトラックが自分に向かって突っ込んで来ているのを見て思わず優斗は叫んだ。

ユウト「ちょ！マジかよオイ！」

トラックはもうすぐ目の前まで来ている。死ぬ、これは逃げようが無い。しかし、彼は不思議と落ち着いていた。

ユウト（ああ、もう死ぬからかな、時間がゆっくりに感じられる。サヤ、もうすぐ俺もそっちに行くみたいだ。お前の誕生日、そっちで祝ってやるよ。って、プレゼント買ってねーから何もあげられねえな、悪い。）

そうして彼は目を閉じた。

彼は気がついていなかった。上着のポケットの中の赤い石が強烈な光を放っていた事を。そして、その光は彼を飲み込み、彼は姿を消した。

車は、何にも当たる事無く通り過ぎた。後に残っていたのは、車が当たる直前、光に飲まれて消えた優斗の事で困惑している人達だけだった。

プロローグ（後書き）

光に飲まれた彼はどうなったのか。次回はナンバーズ達との出会い。

ユウト「異世界トリップとか、とんでもない事になってるな、

俺。」

出会いはいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる(前書き)

今回、ナンバーズとマッドな科学者と出会います。

出会いはいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる

ユウト「あれ？生きてる……」優斗は呆然と立っていた。自分は車に衝突したはず。それなのに体には何ひとつ怪我も無く、車に衝突したときに襲ってくる強烈な痛みも無い。

優斗が目を開けた先に映ったのは、五体満足の体と、どこかの建物の中であろうか、見知らぬ通路だった。

ユウト（どこだ？此処。天国って訳じゃ無さそうだが）

優斗は上着のポケットに手を入れ、赤い石を取り出した。

ユウト（これが無事って事は、車に轢かれてはいないって事か。轢かれていたら、これも粉々になっているだろうからな）

それにしても、何故自分は無事なのか、ここはいつたいどこなのか疑問は尽きる事はなかった。

ユウト「ここに突っ立っていても仕方ない。とりあえず、この建物の外に出てみるか」

優斗は、見知らぬ通路を歩き始めた。

ユウト「そういえばこの建物、誰か人が居たりするの？もし居たら俺、侵入者だとか言われたりするんかな？」

冗談半分でそう呟いた。その時、警報のような激しい音が突然鳴りだした。

ユウト「な、なんだあ！？」

警報の音に驚く優斗。

ユウト「これ…俺のせいか？だとするとまずいよなあ……」

そう言つと優斗は走り出した。この警報の原因が自分なら、捕まった後、警察にでも突き出されて逮捕、という事になるかもしれない。

持っていた疑問を後回しにして、優斗は通路を駆け抜けた。

ユウト「まったく、出口は何処だよ」

独りそう言つと、優斗は通路の壁に寄りかかった。

すると、左腕が何かにいきなり掴まれた感じがした。

左腕の方を見るとそこには、信じられない事が起きていた。なんと、壁の中から一人の女の子が現れたのだ。

???「つつかまゝえた」

可愛らしい声と共に、優斗の体を拘束した。

普段なら女の子と密着すれば、男としては少しは興奮したり恥ずかしいと思つたりするだろうが、今の優斗にはそれどころではなかった。

???「セイン！侵入者は捕まえたか！」

走つて来た通路の奥の方から別の女の子……ではなく女性がやつて来た。

セイン「うん、捕まえたよトーレ姉」

セインという名の女の子が、通路から来た女性「トーレ」にそう答えた。

そして、トーレは優斗の所に来て、質問して来た。

トーレ「貴様……何者だ？管理局の魔導師か？」

ユウト「何者だあ？相手が何者か尋ねるときはまず自分からじやねーのか？それに、管理局とか魔導師って何だよ？」

それもそうか、と言うようにトーレは名乗った。

トーレ「私はNo.3、トーレだ。お前の名は何だ？何故、ここに侵入した？（管理局を知らない？この男はいつたい……）」

ユウト「ああ、俺の名は優斗、五十嵐優斗だ。ここには、気が付いたらいたつて感じたな。つか、ここ何処だよ。」

あのやり取りの後、俺はトーレとセインにとある一室に案内……と言つか連れて行かれた。トーレに「持っているものを全て渡せ」と言われたので、持っているもの……携帯と財布、あと赤い石を渡し

た。赤い石を見たトーレが何か呟いたようだがよく聞こえなかった。トーレが部屋から出て行った後、今の状況を整理していると、扉の開く音と共に、二人の人が入って来た。

片方は紫色の髪に白い白衣を着た男、もう一人は薄い紫っぽい色の髪をした女性だ。

???「すまない、待たせてしまったね。私の名はジェイル・スカリエッティ、隣に居るのはウーノ、私の秘書だ」

ウーノ「はじめまして、ウーノです」

ユウト「あ、五十嵐優斗です。」

挨拶を交わした後スカリエッティは、赤い石を取り出して言った。

スカリエッティ「君の持ち物を調べさせてもらったよ」

ユウト「それは、さっきトーレに渡した石」

スカリエッティ「これは、時空移動型のロストロギアのような。」

時空移動は映画とかで有ったから何となく分かるが、ロストロギアっていうのは知らないな。

ユウト「なあ、その…ロストロギアっていうのはどういう物なんだ？時空移動ってのは何となく分かるけど」

スカリエッティからロストロギアについて聞いた。何でも、世界は一つだけでなく、星の数程あるらしい。そしてロストロギアとは、進化し過ぎた世界の危険な技術の遺産なんだとか。しかも、物によつては世界を滅ぼす程の力を持った物や、俺の持っていたような時空移動型の物もあるんだとか。

ユウト（何でそんなものが俺の居た世界にあつたんだ？）

スカリエッティ「さて、これらの事から君は次元漂流者……世界規模の迷子になってしまった訳だが……」

ユウト「ま、迷子……、って、まだ何かあるのか？」

スカリエツティが優斗の目を見ながら言う。

スカリエツティ「ああ、このロストロギアの魔力が切れていたからね、魔力を注入してみたが、全く反応しなかった」

ユウト「つまり、もうそれは使えない…そう言う事か？」

優斗は嫌な予感を覚えつつ、尋ねてみた。

スカリエツティ「そうだ。この石での時空移動は出来ない。仮に出来たとしても、元いた世界に帰れる可能性はゼロに等しい」

…ここまで言われたら誰でも分かる。

スカリエツティ「…君はもう、元の世界には帰れないという事だ」

出会はいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる(後書き)

さて、これから優斗はどうなるのか!? 次回、スカリエツティが優斗に言った提案とは?そして、まだ見ぬナンバーズとの邂逅。ユウト「改めて見ると、ナンバーズ達のあの格好…なんつうか…エロくねえ?」

何処の世界も組織の裏は真っ黒（前書き）

何か、半分位が説明になってしまった気がする。

何処の世界も組織の裏は真っ黒

帰れない。

それが意味する事は、二度と元の世界に帰る事は出来ない。

スカリエッティの言葉を聞いた優斗の反応は……………

凄く軽かった。

ユウト「あー…まあ、いつか。」

優斗の余りにも軽い発言に、スカリエッティは思わずつつこけた。

スカリエッティ「ず、随分と軽くないかい？元の世界に帰れないと言うのに」

ユウト「ああ、どうせ帰れても家族もいなければ友人もいないし、元の世界に未練は無い。それに、ここに来る直前、車に跳ねられて死ぬ寸前だったんだ。多分、俺は車に跳ねられて死んだ事になっっているんじゃないか？」

優斗のその言葉を聞いたスカリエッティは少し考えた後、何を思いついたのか、ニヤリと笑みを浮かべて優斗に言った。

スカリエッティ「それならば優斗君……………此処に住まないかい？」

優斗はスカリエッティのこの提案に思わず「……………は？」と言わんばかりの表情になってしまった。

スカリエッティの言った提案には、隣にいたウーノ達も驚いていた。

スカリエッティ「君は元の世界に帰れない以上、この世界で暮らすしかない。しかし、今の君には頼れる人もいなければ先立つ物もない。管理局の所に行けば、次元漂流者という事で保護して貰えるけ

ど、これはオススメ出来ないね」

「管理局ー、トーレも言っていた、貴様は管理局の魔導師か、と。ここで優斗は、先ほどから持っていた疑問を口にした。

ユウト「そっぴゃあ、さっきもトーレが言ってたけど、その…管理局ってのは何なんだ？何かの組織か？」

スカリエッティ「ああ、管理局というのは……………」

優斗はスカリエッティから管理局の事を聞いた。

管理局とは、時空管理局の事で、そこでは魔導師という魔法を使う者達が働いている。魔導師は、体の中にある「リンカーコア」という器官から生じる魔力を用いて魔法を使う。「リンカーコア」がなければ、魔法を使う事は出来ないとのこと。

そして、管理局についてだが……………表向きは、魔法というクリーンな力を用いて、次元世界の平和を守る正義の組織。

しかしその裏……………真実は、リンカーコアを持つ人は少ないため、管理局は万年人材不足である。そこで、魔導師の人数不足を補うために管理局が行っていることが、…人造魔導師の製造だった。スカリエッティに、映像で管理局の裏を見せてもらったが…映像の中身は『地獄』といえるものだった。

そこにあつたのは、

生態実験により、原型を留めていない『何か』、

泣き叫ぶ子供や女性、男性、動物達。

気にもせず実験を繰り返す研究員達。

ユウト「な…何なんだよ！これは…！」

余りの残酷さに、声を荒げる優斗。

スカリエツティ「…これが、管理局の実態だ」

そう言うと、スカリエツティは優斗の方を見た。すると、優斗の体が震えている。そして、優斗は叫んだ。

ユウト「ぎげんじゃねえよ！！何が正義だ！何が魔法だ！、」

優斗の心からの怒りと叫びに、優斗の後ろにいたトーレも思わず後ずさりしてしまった。

ユウト「何が世界を『管理』するだ！自分の世界すらまともに『管理』出来てねえ癖に！それに…人の命を何だと思ってるんだよ！」

少しして、落ち着いた優斗は

ユウト「スカリエツティ、此处に住ませてくれ。そして、アンタ達の計画に協力する。でも、唯の協力じゃねえ」

ユウト「管理局は……ぶっ潰す」

その言葉を聞いたスカリエツティは、

スカリエツティ「分かった。歓迎するよ、優斗君」

あの後、俺はセインに部屋に案内された。その途中で改めて自己紹介した。

No.6って言ってたけど、No.って何？

そのうち聞けばいいか。

暫く案内された部屋でゴロゴロしてたらスカリエッツィが来て、夕食という事で食堂に案内された。そこで他のナンバーズ達に紹介するんだと。道中で聞いたらNo. 1. っていうのは、ウーノ達ナンバーズの製造番号の事で、スカリエッツィの作品であり娘、そして『戦闘機人』だと言っていた。

あれこれ話しているうちに食堂に着いたので、中に入った。

食堂には自分とスカリエッツィを除いた他のメンバーが全員揃っていた。

最初は驚きやら何やらで余裕が無かったが、落ち着いて周りを見ると、…なんつうか…あの全身タイツみたいなスーツ姿…エロくねえ？目のやり場に困るんだけど。見てる方が恥ずかしいんだけど！？

そんな事を思いつつ、俺は食堂に居るメンバーと自己紹介した。

ユウト「五十嵐優斗だ。今日から此処に住む事になった。よろしくな」

そう言うと、向こうも自己紹介をした。

濃いピンク色の髪を後ろでまとめている女の子が、ウエンディ。

赤髪の女の子が、ノーヴェ

茶色のロングヘアを、黄色いリボンで後ろで縛っている女の子が、ディエチ。

栗色の髪を両脇で結び、眼鏡をかけてる女性が、クアットロ。
そして……

チンク「チンクだ、よろしくな」
チンクと名乗った少女は、銀髪は腰の下まで伸びて、右目を黒の眼帯で隠した十代前半の少女だった。

……俺はその姿を見たとき驚いたよ。

チンクと…死んだ妹の沙耶が、

……あんなにも、似ていた事に……

何処の世界も組織の裏は真っ黒（後書き）

スカリエッツィ達と暮らす事になった優斗。しかし、問題が発生した。その問題とは？

ユウト「見せてやるよ…、俺の料理の腕前を！」

お金があると、つい余計な物まで買ってしまったりする（前書き）

チンクとクアットロの口調、これで合ってたっけ？

お金があると、つい余計な物まで買ってしまったりする

俺達はお互いに自己紹介（他にもN.O.2のドワーエがいるが、今は任務中でいないとの事）した後、みんなで夕食を食べる事になった。

しかし……

ユウト「おい…、何だ、これ？」

スカリエッティ「何…って、夕食だが？」
夕食といえば、本来は手間暇かけて作った温かいおかずが沢山並んでいるだろう。

ところが、此処に並んでいたのは……

ユウト「俺の目がおかしくなければ、クッキーとかサプリメントにしか見えないんだけど」
スカリエッティ「君の目は正常だよ」
そう、此処に並んでいたのは、優斗の居た地球では、バランス栄養食品と呼ばれていた物だった。

ユウト「なあ、ウエンディ、まさかとは思っけどよ…、今までも『これ』だったとか…言わねえよな？」

ウエンディ「ん？今までずっと『これ』だったっスよ？」

その言葉を聞いた優斗は、部屋の隅に置いてある冷蔵庫に向かった。ノーヴェが「いらねえなら貰っちゃまうぞ」と言っていたが、優斗の頭の中はそれどころではなかった。

冷蔵庫のドアを開け、中身を見た優斗は絶句した。
冷蔵庫の中身は、

バランス栄養食品でギッシリ詰まっていた。

優斗はドアを閉め、机に向かった。そして……

ユウト「テメエら！！馬鹿か！！」

優斗の叫びに、全員の動きが止まった。

ノーヴェ「な…何だよ！いきなり!？」

ユウト「何だじゃねえよ！！あの栄養食品の数こそ何だ！毎日あんなもん食ってられるか！」

クアットロ「あら、好き嫌いは駄目よ、優ちゃん」

ユウト「好き嫌いとか以前に体壊すわ！つか何だ！優ちゃんってのは!？」

クアットロ「優斗だから『優ちゃん』よ」

ユウト「…それより、何で食材の一つや二つ無いんだ」

スカリエッティ「そ、それは…誰も料理が出来ないから…」

その言葉を聞いた優斗は決心した。

ユウト「分かった。スカリエッティ、明日食材を買いに行ってくるから金をくれないか」

スカリエッティ「あ、ああ、構わないよ。でも君はこの世界をよく知らないだろう？案内役に私の娘を一人連れて行きなさい」

チンク「なら、私が行こう」

スカリエッティ「それならチンク、頼んだよ」

チンクは、「分かりました、ドクター」と言った後、此方の方を向いた。

チンク「そう言うわけで、明日は私が案内しよう」

ユウト「あ…ああ、それじゃあ、頼むわ。()やっぱりよく似てるんだよなあ…」

――翌日――

俺は朝飯を我慢して『あの』栄養食品で済ませた後、スカリエッティの所に向かった。

スカリエッティ「やあ、おはよう、優斗君」

ユウト「ああ、おはようさん。さっそくだが、食材、買いに行つて

くるから金をくれ」

そう言うと、スカリエツティは優斗に大量のお札を渡した。

スカリエツティ「それだけあれば足りるだろう？ チンクはもう準備して待つてるよ」

ユウト「分かった。じゃあ行ってくる」

アジトの入り口で待つていたチンクと合流し、街に向かった。ちなみに、チンクは昨日の全身タイツ姿では無く、白いシャツにGパンを穿いていた。聞くと、街への偵察用にみんな普通の服は持っているとの事。

――首都、クラナガンー

ユウト「しつかしなあく、こついつのを見ると、改めて此処は地球じゃねえんだなって思うな」

優斗が周りを見渡すと、空間に浮かぶモニターや見たことの無い文字が目にはいる。

チンク「？、地球はどんな所何だ？」

ユウト「地球も科学は発展してるけど、此処までじゃないな。それに、文字が違う」

チンク「そうか。ちなみに、あれは魔法だぞ」

チンクが空間に浮かぶモニターを指差して言う。

ユウト「は？あれが？、どう見ても科学じゃねえか。まさか、あの

超科学がこの世界の魔法ってか？」

魔法ってのはもっと、ファンタジーなもんかと思ってたのに。

ユウトがそう呟いているうちに、二人は大型スーパーに到着した。

食材を買い物籠に入れながら歩いていると、チンクが話しかけてきた。

チンク「そういえば優斗、お前は料理出来るのか？」

ユウト「ん？ああ、これでも料理は得意だぜ。何か食べたいのがあったら作ってやるけど？」

チンクは少し困ったように言った。

チンク「うむ…料理を食べたことが無いからな…」

自分は何が食べたいよく分からない。ふと、商品のある棚を見た、そこで目に映ったのは、

プリンだった。

チンク「なあ、プリンは作れるか？」

チンクはプリンの方を見ながら言った。

ユウト「プリン？いいぜ。すると…卵と牛乳がいるな…」

そう言い、牛乳と卵を籠に入れた。

チンクはこの様子を見て、何気なく優斗に聞いた。

チンク「優斗はこの世界に来る前は、よく家族に料理を作っていたのか？」

優斗はチンクの何気ない質問に一瞬表情を変えた。

ユウト「そうだな。母さんが料理出来なかったから、よく俺が料理を作ってたな。父さんは仕事で家に帰るのが遅かったし、妹のサヤは、病弱だったから、俺が作るしか無かったんだけど」

チンク「そうだったのか。しかし、優斗がいきなり居なくなって、家族は心配しているのではないか？」

ユウト「家族は…半年前に死んだよ。事故にあってな…」

チンクは優斗に悪い事聞いたと思い、すぐに謝った。

チンク「！！、済まない、悪い事を聞いた」

ユウト「気にすんな。さて、会計して帰るぞ」

チンク「あ…ああ」

—————帰り道—————

道を歩いている途中、チンクが優斗に謝るように言った。

チンク「優斗、さっきは、悪い事を聞いて済まなかった」

これに対して優斗は

ユウト「さっきも言ったろ？気にするなって」

その言葉を聞いたチンク、それでも済まなそうに優斗の顔を見た。その顔は、

とても悲しげだった。

チンク「優斗…お前は気にするな、と言っていたが、家族の事を話しているとき、悲しそうな目をしていただぞ。

……特に、妹の事を話していた時は」

チンクが言った後、優斗はチンクを見据えて言った。

ユウト「実はな…、最初、お前を見た時、妹…サヤを思い出したんだよ」

チンク「妹を…？」

チンクは少し驚いた表情になった。

ユウト「ああ、なんつうか…、よく似てるんだよ…。特に、雰囲気とかがな…」

チンク「そうか…」

ユウト「そうだな…。帰ったら、俺の家族の事、俺の事を聞かせてやるよ」

チンク「!?!、優斗の事を…」

ユウト「ああ、そんじゃあ、アジトに帰るぞ」

そして、二人は道を再び歩き出した。

お金があると、つい余計な物まで買ってしまったりする（後書き）

アジトに戻った優斗とチンク、優斗の過去とは一体？

ユウト「そっぴいえは俺、今回料理するとか言って結局してねえや」

……次回、優斗が料理の腕前を發揮します。

学校で教師が「いじめはよくない」とか言ってるけど実際はいじめの現場を見て

この話を書いてたら、原作のナンバーズ達も一つの家族みたいな感じだよな、と思った。

つか、話が凄い事になってるかもしれない。

学校で教師が「いじめはよくない」とか言ってるけど実際はいじめの現場を見て

アジトに帰った俺達は、さっそく昼食の準備を始めた。

帰った時には十一時くらいになっていた。とりあえず俺は、米を炊いた後、野菜炒めや卵焼き作る事にした。作っている最中に、セインとウエンディがやって来て

セイン「へえ、優斗って料理出来たんだ？」

ウエンディ「美味しそうツスね、何を作ってるんスか？」

と、言ってきたので、暇なら食器を出してくれ、と言っておいた。

一時間後、米も炊けたので、昼食を食べる事にした。ウーノとスカリエッティも栄養食品以外の食事は初めてとの事で、食堂に集まっていた。普段は研究室で食事しているとウーノが言っていた。

ユウト「うーし、出来たぜ」

ディエチ「これ…優斗が作ったの？」

ノーヴェ「何だ、美味そうじゃねえか」

みんな席に着き、手前に置かれてる箸を見る。

トーレ「これは何だ？」

ユウト「箸だ」

クアットロ「どうやって使うのかしらあ？」

ユウト「それはだな……」

優斗が、箸の使い方をナンバーズに教える。

数分の箸講座を終えて、ナンバーズの皆は箸が使えるようになった。

ノーヴェ「よし。じゃあ早速」

ユウト「ハイ、ストープ！ちょっと待った！」

ノーヴェ「何だよ!？」

優斗がノーヴェを制す。

ユウト「食事を始める前に、『いただきます』は？」

ノーヴェ「何だよ、ソレ？」

ユウト「まあ、食材になってくれた命に対する感謝の気持ちみたいなもんだ」

デイエチ「そうなの？」

ユウト「そうなの。ちなみに食べ終わった時は『ごちそうさま』だ」

そう言つと、トーレはなるほどと言い

トーレ「それなら、我々も優斗の言つ通りにするか」

ユウト「それじゃあ……」

全員『いただきます』

俺の作った料理はとても好評だった。
フーかノーヴェ、オメーどんだけ食ったよ。ご飯何杯おかわりした？軽く五杯以上食ってたよな？

そして、後片付けの最中

ユウト「それじゃあチンク、後で俺の部屋に来てくれ、そこで話すから」

チンク「?、ああ、分かった。…しかし、いいのか？家族の事、話すのが辛かったら、話さなくても良いんだぞ」

その時、横から声が掛かった

セイン「?、ねえねえ、何の話？」

デイエチ「優斗の家族がどうこうって聞こえたけど…」

ウエンディ「あ、あたしも聞きたいっス」

スカリエツティ「そういえば…君は昨日、家族がいなしと言っていたね」

まだ食堂に残っていた四人が二人の話を聞いていた。

チンク「優斗……」

優斗は四人の方を向いた。

ユウト「…そうだな。いいぜ、俺の家族の事、お前たちにも聞かせてやるよ」

そう言うと六人は机の椅子に座った。

ユウト「それじゃあ話すとするか、俺の事、俺の家族の事を……………」

—————

俺の家は元々三人家族だった。

母さんは専業主婦で、父さんは普通の会社勤めのサラリーマンだった。

俺の家は別段金持ちでも貧乏でも無かった。

そして、俺が3歳の時、妹のサヤが生まれた。

サヤは生まれつき体が弱かった。髪は白くて目は赤い…色素欠乏症…アルビノだったせいかは分からねえけど。

まあ、それでもあの頃は家族四人、とても幸せだった。

俺が九歳になった時、サヤは六歳で小学校に入学した。

俺はその頃は友人もいたし、結構楽しかった。

でも、それも余り長くは続かなかった。

サヤはアルビノで、周りとは髪や目の色が違った。

そのせいか、サヤはクラスで孤立していた。一人だけ、周りとは違ってから気味悪く思われて居たんだろう。

サヤはよく苛められていた、　　気持ち悪い　　近寄るな　　等と言われたり、石を投げつけられたりされていた。

助ける度に、本人は大丈夫と言っていたが、とてもそうは思えなかった。

それからある日、事件が起こった。

サヤを苛めていた集団の一人が投げた石が

サヤの右目に強く当たった

俺はその瞬間を見た

サヤの右目から

赤い血が出たのを

俺は怒りがこみ上げ、サヤを苛めていた集団を半殺しにした。

俺はサヤを背負って近くの病院に行った。

病院で検査の結果、医者に言われた事は

サヤの右目は治らない

俺はその言葉を聞いて、とても悔しかった。医者に八つ当たりもした。

数日後、サヤは病院から退院した。

右目に眼帯を付けて

俺は学校で孤立した。人を半殺しにしたことで、俺は恐れられた。仲の良かった友人も離れていった。

サヤはあの事があった後も学校に通っていた。

サヤはより苛められるようになった。

白い髪に赤い目、それに眼帯。

その姿を見た周りの人は、サヤにこんな事を言った

「――『化け物』――」

と

そう言われた日の夜、サヤは俺に泣きついてきた

その日、俺は決めた。サヤを苛める奴を、サヤを泣かせる奴は絶対に許さない。

その日から、学校で俺も苛められるようになった。

『化け物の兄』

として……

俺はそう言った奴らを、男も女も関係なく、半殺しにした。

「サヤを悪く言う奴らは許さねえ」と

そう言う俺の姿を見て、誰かがこう言った。

「……『死神』……と。」

サヤは学校に行かなくなった。俺は中学へ進学した。

中学でも孤立し、恐れられていた。俺の事を何処からか聞きつけた奴らが、サヤの事で悪く言ってきたりした。それでよくケン力になった。

俺は中学を卒業して高校に入った。

成績は良かったから、入るのは余り問題じゃ無かった。

中学の他の奴らは誰もいなかった。

中学校や小学校のときみたいに友人は居ない…と言うか作っていない。

高校生活は平和だった。

俺やサヤの事を悪く言ってくる奴らが居なかったからな。

俺の誕生日には、サヤか近くにある河原で拾ったと言って、赤い…宝石のような石をくれた。

だが……数日後、

両親とサヤが死んだ。

原因は居眠り運転をしていた車に跳ねられたとのこと。

俺は家に居たから無事だったが、サヤは、両親は、この世から居なくなつた。

それから半年後、俺は街中で車に跳ねられて死んだ。そう思ったならこのアジトにいた。そして

お前たちに出会った

――――

ユウト「……とまあ、これが俺の家族とか、過去のことだ」

そう言い、優斗は話終えた。周りを見ると、何人が泣いていた。

ウエンディ「サヤが…サヤがかわいそうっス…」

ディエチ「うん…」

セイン「優斗…大変だったんだな…」

ユウト「……そーだな……、俺は最初、チンクを見たとき、チンクとサヤが被って見えた。似ていたからな……」

そう言い、優斗は時計を見た。

優斗「……と、そろそろ夕食の準備をしないとな」

今まで

黙っていたスカリエツティは口の開いて、優斗に聞いた

スカリエツティ「君は……寂しく無いのかい？」

ユウト「寂しく無い……って言えば嘘になるな……」

優斗は続けて言う。

ユウト「さつき、みんなで昼飯食ってた時も、家族が生きてた時の事を思い出してた。」

五人は無言で聞いている。

ユウト「家族と一緒に食ってた飯は美味かった。ああ、さつき食った飯も美味かったぞ。……って、自分で作ったんだけどな。でも、何かが違うんだよ……」

多分、一緒に住んでいるとは言え、家族じゃ無いからかな」

優斗の言葉を聞いて、スカリエツティは椅子から立ち上がった。

スカリエツティ「優斗君。私は君のことを家族同然だと思ってるよ」

ユウト「え……!？」

スカリエツティに続けてセイン達と言う。

セイン「あたしも優斗の事、家族だと思ってるよ」

ウエンディ「そうっすよ。一緒にご飯食べたったりしたんすから」

デイイチ「優斗は違うの？」

四人の言った事に優斗は

ユウト「いや…、そうか、そうだったな。此処に住むになった時から、俺は、俺達はもう

――『家族』なんだよな――」

スカリエツティ「じゃあ、改めて言おう。――ようこそ、歓迎するよ、優斗君」

ユウト「――ああ」

――

こうして、俺は改めてスカリエツティやナンバーズの一員になった。

そして夕食を食べた後、チンクが俺に話しかけてきた。

チンク「優斗、家族と食べた料理はどうだ？」

ユウト「どうって…、俺が作ったんだけどな……」

――美味かったぜ、さっきよりも」

チンク「…そうか、なあ、また今度、プリン、作ってくれないか？。

お前の作ったプリン、美味かったからな……」

ユウト「了解」

ユウト「チンク」

チンク「何だ？」

ユウト「家族って……いいよな……」

チンク「そうだな……」

学校で教師が「いじめはよくない」とか言ってるけど実際はいじめの現場を見て
さて、次回からは今までと違って変わって平凡な日常になります。
次回、探検、発見、ミッドチルダの都市クラナガン。
ユウト「これは…良いものだ…」

男と女が一緒にいるからといって、デートとは限らない(前書き)

携帯を修理に出した。修理中の間、代用の携帯を使って書いているが、凄く使いづらい。

男と女が一緒にいるからといって、デートとは限らない

俺がこの世界に来て早一週間、色々な事があった。

まず、トーレやノーヴェと訓練に参加したり……訓練したときから自分の体の中に何か違和感を感じてるのは…多分、気のせいかな？

それから、俺が風呂に入ってるときに、ウエンディとセインが風呂に入ってきたり（ちゃんと体にタオルを巻いて隠させた）

セインが意外にも料理できたり（結構美味かった）、

ウーノにこの世界の文字を教わったり（とりあえず文字は読めるようになった）、

この一週間にあった事の中で、こんな会話もしたな……

トーレ「優斗、お前は何とも思わないのか？」

ユウト「あ？なんだよいきなり？」

トーレ「我々戦闘機人は闘う為に生み出された存在だ。その気になれば人を殺せるんだぞ？おまえは恐ろしくないのか？」

トーレがそうやってきた、それに対して優斗は

ユウト「はあ？何言ってるんだよ、戦闘機人が恐ろしい？冗談いうな」
トーレ「な！？……」

優斗は続けて言う。

ユウト「戦闘機人じゃあ無くたって人は殺せるんだよ。心臓を銃でぶち抜けば死ぬし、鉄パイプとかで頭を殴れば死ぬ。」

トーレ「それは…そうだが…」

ユウト「俺としては、自分がなにをしているのか、自覚を持っていない人間の方がよっぽど恐ろしいわ」

ユウト「トーレ、もし、まだ自分達戦闘機人が恐ろしいか、とか言うんなら、これだけは言わせる」

ユウト「テメエ…馬鹿か？」

—————

ま、本当に色々あったな。

ああ、そういえば今日スカリエッティに研究室に来るように言われてたな。早いところ行かないと。
しかし、俺に何の用なんだ？。

優斗は自分の部屋を出て研究室に向かった。

ユウト「俺の魔力検査…ねえ」
スカリエッティ「ああ、もしかしたら君も魔法が使えるかもしれないからね」

ユウト「それで、どうやって調べるんだ？」スカリエッティは近くに置いてある装置を指差した。
スカリエッティ「その装置の前に立ってくれ」

ユウト「こっか？」

スカリエッティ「よし、装置を動かすよ、ウーノ」

ウーノ「はい」

ウーノが装置のボタンを押す。
少しして装置が止まった。

ユウト「なあ、どうだ？」

スカリエッティは装置が出した検査結果を見て言った。
スカリエッティ「それが…」

—————

俺はあの検査の後、スカリエッティに外出許可をもらって街に来た。

検査結果だが……俺には魔力が無いとの事。

まあ、元々地球には魔法なんざ無かったから別に魔力が無くてもシヨックではないけど。

それで、街に来た俺は、一緒に行くと言っついて来たセインといろんな所を見て歩いている。

デパートでは

セイン「ねえねえ？この服はどう？」

水色の服を手を持って優斗に聞く。

ユウト「お、いいじゃねえか」

服を見たり……、

レストランでは

ユウト「うん、このドリア、結構美味いな」

セイン「ハンバーグも美味しいよ？」

飯食ったり……

ゲームセンターでは

セイン「あゝ、また負けた」

ユウト「よっしゃ！これで5連勝！」

ゲームで対戦したりして、あっという間に時間が過ぎた。

――――
そして、帰り道……

セイン「今日は楽しかったね」

ユウト「そうだな、帰ったら飯の支度しねえと」

そう話しながら、アジトへの帰り道を歩いていた。

その途中、優斗は道を外れて森の中に入って行った。それをセインが慌てて追いかける。

セイン「ゆ、優斗！？いきなりどうしたの？そっちは森だよ！？」

ユウト「いや、何か、俺を呼ぶような声がこっちから聞こえてきたんだよ」

セイン「優斗を……！？」

しばらく歩いていると、森の中に洞窟のような穴を見つけた。

セイン「なにこれ……、洞窟？」

ユウト「だよな……、どうみても」

ユウト「……やっぱり此処からだな、俺を呼ぶ声するのは、セイン、俺はこの中に行く。お前は先に帰ってきてくれ」

セイン「え！？」

ユウト「お前まで来たら、誰があいつらの飯作るんだよ。なに、心

配すんなって、俺なら大丈夫だからよ」

セインは悩んだ後

セイン「……………うん、わかった。危ないと思ったらすぐ帰って来てよ？」

ユウト「分かってるよ。じゃあ、行ってくるわ」

セイン「うん。気をつけてよ、優斗」

そう言った後、セインは先にアジトへ帰った。

ユウト「ああ。…さて、いったい、何が俺を呼んでるってんだよ？」

そして優斗は、洞窟の中へ入って行った。

男と女が一緒にいるからといって、デートとは限らない（後書き）

優斗を呼ぶ声の正体は？

次回、洞窟探検はロマンがある

??? 『私の登場ですね』

ダンジョンの奥にあるのはアイテムとボス戦（前書き）

優斗の持っていた違和感の正体は？洞窟の奥にあるものは？そして、優斗の何が目覚める。

ダンジョンの奥にあるのはアイテムとボス戦

セイン「……………というわけ、どう思う？ドクター？」

セインはアジトに帰った後、洞窟の事と、優斗が洞窟の中に入って行った事を話した。

スカリエッティ「ふむ……………。何かと呼ばれて、か……………。しかし、そんな所に洞窟は無かったはずだけど」

セイン「うーん、あの洞窟、なんなのかな？」

スカリエッティ「私にもその洞窟の事はよく分からないが、とりあえず、優斗君が帰って来たら話しを聞こうか」

セイン「うん……………、そうだね、ドクター」

—————

俺は今、洞窟の中を歩いている。洞窟の中は一本道だから、結構暗いけど迷わずに済んでいる。

この洞窟、一本道で助かったよ。入り組んでいたら、出れるのが何時になるかわかったもんじゃない。

しかも、入ってすぐ入口の方を見たら、洞窟の入口が消えていたんだ。

本当に何なんだ？この洞窟。
前々から自分の体の中にある違和感といい。

だいたい20分ぐらい歩いていたら、洞窟の出口っぽい光が見えた。
光の先にあったのは、遺跡の様な石造りの部屋と、長い階段だった。
…この上に何かがある、そう思った俺は階段を駆け上がる。

階段の先にあったのは祭壇の様な空間だった、その中心に

ユウト「あれは…剣か？」

赤い装飾の付いた一本の剣が地面に刺さっていた。

俺はその剣が気になり、近づいた。

その時

??? 『来るな！私から離れる！』

突然、剣が叫んだ。

ユウト「な、え！？剣が喋った！？」

「??? 『早くしろ！死にたいのか！』」

ユウト「は！？死ぬ！？そりゃどういう…」

事だ、そう言いかけたとき、祭壇の奥から壁が崩れる音と共に、自分よりも少し大きいゴーレムが現れた。

ユウト「おいおい、何だありゃ!?!」

「??? 『くっ…！遅かったか…』」

優斗は次から次へと起こる事に驚きを隠せない、そうしている間にも、ゴーレムは優斗の居る方へ近づいている。

ユウト「うわ!?!何かこっちに来てるし!?!」

優斗が「やべーよ、マジやべーよ」と慌てていると、剣が優斗に話しかけてきた

「??? 『…そこのお前！私を抜け!』」

ユウト「ああ!?!いきなりなに『早くしろ!』ダァーッ！わーっ
たよ!」

そして、俺は勢いよく剣を引き抜いた

すると、自分の中から何かが解き放たれる感じがして、今まで身体の中にあつた違和感が無くなった。

前を見ると、ゴーレムがこっちに近づいて来ている。しかし、俺は至って冷静でいられた。そして、俺の頭の中で、一つの技が浮かんだ。

俺は近づいて来るゴーレムに向かって、大きく剣を振りかぶり、勢いよく振り下ろし、その技を放った。

ユウト「空破斬!!」

技の名前と共に剣を振り下ろすと、優斗の前方へ衝撃波が飛んでいく。

衝撃波はゴーレムに当たり、動きを止めた。……と思ったら、またすぐに動き出した。

ユウト「ったく!まだ動くのかよ!??」

「???」おそらく、後一撃で倒せるだろうが、今の攻撃よりも強力なものではなければ奴は倒せない」

ユウト「今のよりも……」

今のよりも強力な攻撃。それを聞いた優斗の頭に、また新たな技が浮かんだ。

優斗はゴーレムに素早く近づき、剣を振り下ろした。

ユウト「ケイオスソード!!」

剣に黒いオーラを纏わせ、ゴーレムに斬撃を繰り出した。

ゴーレムは真ん中で真っ二つになり、動かなくなった。

???『やったな!』ユウト「みてえだな…」

動かなくなったゴーレムを見て一人と一本は言う。ここで、優斗は疑問に思っていた事を剣に聞いた。

ユウト「なあ、いろいろ聞きたい事がある。」

???『?、何だ?』

ユウト「まずは……」

—————

俺はあのゴーレムを倒した後、この剣にいろいろと聞いた

まずはこの赤い剣…こいつの名前は『魔剣レヴァンティン』という。

(ちなみに俺も名乗った)

何故、俺はあんな技を使えたか…これは俺の中に眠っていた潜在能力で、この剣に触れた事でそれが目覚めたようだ。

あの違和感は多分、この世界に次元移動した事と、訓練によって目覚めかけていたからなんだろうな。

そして、この洞窟は、狭間の洞窟といい、何でも、遠い昔に滅んだ世界にあつて、その世界が滅んだ後、次元空間を漂っていたらしい。その途中、たまたまミッドチルダに流れ着いた。

そこに、俺が洞窟に入つて来て、今に至る。そして、この剣…レヴァンティンだが、元々はただの剣だったらしい。

らしい、と言うのは、自分でもよく分からないんだと。気が付いたら意思を持っていた様だ。

話し終わると、レヴァンティンは早くこの洞窟から出るように優斗に言った。

レヴァンティン『ゴレムがいた所に出る魔法陣がある、そこから出るぞ』

ユウト「よし、………つか、お前、抜き身で危ないんだけど」

レヴァンティン『ああ、そうだな…何か、器になるもの…石でもいいから何か持ってないか？』

ユウト「石？昔、妹のサヤから貰ったのが…」

優斗はポケットから赤い石を取り出した。

すると、石と剣が光だした。少しして光が収まると

ユウト「何だ？いったい『おい』うわ！？石から声が!？」

レヴァンティン『ふむ…、なかなか入り心地が良いな、気に入った』

ユウト「なあ、剣が見当たらないけど、もしかして、石の中？」

レヴァンティン『そうだが？』

ユウト「……………」

—————

洞窟を出ると、入った時から余り時間が経って無いみたいだった。狭間というだけあって時間の流れが違うんだと。洞窟は跡形もなくなっていた。多分また、次元を漂ってるんだろっな。

57

アジトに帰った俺達はスカリエツティ達に洞窟であった事、俺の目覚めた力の事、レヴァンティンから聞いた事を話した。スカリエツティがレヴァンティンを研究したいと言ってきたが、何かを感じ取ったのか、レヴァンティンが全力で嫌がったため、研究を断念した事は、割とどうでもいい話し。

あ、レヴァンティンは自分の意思で剣の切れ味を変えられると言っていた。

そこで、自分の扱いは俺の意思に委ねると。最後に、レヴァンティンも俺やナンバーズ達の一員になった。

ユウト「これからよろしくな、レヴァンティン」

ダンジョンの奥にあるのはアイテムとボス戦（後書き）

優斗 は レヴァンティン を 手に入れた

次回、主人公の設定は結構大事

ユウト「俺の設定だな」

レヴァンティン「私の設定もあるぞ」

主人公設定は話しを書く上で最も重要だと作者は思っている(前書き)

紅白観ながら書きました。今回は主人公設定です

主人公設定は話しを書く上で最も重要だと作者は思っている

名前：五十嵐優斗

性別：男

容姿：黒髪黒目で、顔はブレイブルーのラグナに似ている

使用武器：魔剣レヴァンティン（剣の見た目はスターオーシャン3のやつ）

好きな事、物：家族、天玉うどん、料理

嫌いな物：時空管理局、お化け、偽善者

身長：178cm

体重：68kg

戦闘ランク：A+（これからも上がっていく予定）

必殺技、戦闘技能（現時点で使える技）

空破斬：剣圧による衝撃波を飛ばす。衝撃波は地上をはって進むた

め、空中にいる相手には当たらない。

ケイオスソード…剣に黒いオーラを纏わせ、強力な斬撃を繰り出す。必殺技、戦闘技能はこれからも次第に増えていきます。

魔剣レヴァンティン…意思を持った剣で、元々はただの赤い剣だったが、気が付いたら、意思を持っていらしい。

今まで、狭間の洞窟にいたが、優斗に出会ったあとは優斗の持っている赤い石に宿った。優斗が剣を手につイメージをすれば石から出てくる。

ちなみに、優斗のレヴァンティンはデバイスではなく、ロストロギアのような物である。

主人公設定は話しを書く上で最も重要だと作者は思っている（後書き）

必殺技、戦闘技能が増え次第設定に書き込みます

番外編…すぐろくで一番乗りってときに『ふりだしにもどる』のはよくあるじゃない

今日は正月なので、番外編です。

今回の話は『ブレイブルー』のライチさんのギャグルートを中心に書きました。

後、ウーノのキャラが少しおかしくなった。

番外編…すぐろくで一番乗りつてときに『ふりだしにもどる』のはよくあるじゃないか

始まりは一冊のノートを見つけた事だった。

—————

一月一日、今日は正月である。

この世界、ミッドチルダでも新しい年が始まった。

そして、優斗達のところも今日は正月ムードでいっぱいである。

セイン「あけまして！」

ウェンディ「おめでとございます！」

スカリエツティ「ああ、おめでとっ」

ウーノ「ほら、二人ともこれ、お年玉よ」

セイン「やった！いっぱい入ってる！」

ウェンディ「ありがとうっス！ウーノ姉！」

ユウト「おーい、オメーら、雑煮が出来たぞー」

チンク「もうみんなは食堂に集まっているぞ」

ウェンディ「あ、今いくっス！」

優斗達は食堂に集まり、みんなでお雑煮を食べたりした。
そして……

—————

ディエチ「そういえば、こんなものを見つけたんだけど？」

ディエチが部屋から持ってきたのは一冊のノートだった。

ノーヴェ「何だそれ？」

ユウト「ノート…だよな？」

ディエチ「うん。私の部屋にあったから持ってきた」

ディエチはノートを開く。

ノートの中はすぐろくになっていた。

ユウト「お、すぐろく帳か」

スカリエツティ「ん？何か書いてあるね」

セイン「え〜と、遊び方が書いてあるよ？なにになに…」

すぐろく「ちょう」の遊び方…

まずはすぐろくを中心にして輪になります

次に、サイコロを振り、出た目の数だけすぐろくのマスを進みます
ちなみに、サイコロは何個も使えますが、一回使い始めたサイコロ
は終わりまで使いつづけなければルール違反になります。

もし、違反した場合はー

ウエンディ「場合は……」

何か恐ろしい事が起こります

優斗達はノートを見ながら言った

ユウト「…恐ろしい事って何が起こるんだよ？」

チンク「分かん。しかし、『何か』が起こるんだろっ」

ノーヴェ「その『何か』ってなんだよ……」

セイン「気になるけど……」

トーレ「その『何か』が分からないのが怖いな」

ユウト「…やるの、辞めとこうぜ」

優斗はノートを閉じようと手をのばすそこにスカリエッティが待っ
たをかけた

スカリエッティ「!!、待った!まだ何か書いてある!」

それと、このすぐろくを一度開いたら、終わるまで閉じてもルール違反になり、何か恐ろしい事が起こります。

チンク「これは…やるしかなさそうだ」

ユウト「そうだな…」

そして優斗達は恐ろしい『何か』を回避するため、すぐろくを始めた。

――――

ユウト「じゃあ、最初はウーノからだな」

トーレ「最初はサイコロは一つでいいだろうな」

ウーノ「それでは…」

ウーノはサイコロを振った、すると。

全員『おお!』

ウエンディ「いきなり六!すごいっス!」

ノーヴェ「これならすぐに終わりそうだな」

ウーノ「え〜と、1、2、3、4、5……あら?何かしら、このマス?」

ユウト「何だ？何か書いてあるな？」

セイン「えっと……このマスに止まった人は、右隣にいる人に……」

スカリエツティ「おっ、私だね」

セイン「チュー……」

スカリエツティ「ちゅ、ちゅう！？」

セイン「トハンパな攻撃を、その人への不満を言いながらくわえなさい。だって」

スカリエツティ「ええっ！？」

ウーノ「ど、どどういう事？」

ウエンディ「あ、遊び方の所に書いてあるっス」

チンク「なになに……『このすぐろくは、マスに書かれてる事を実行しないとあがれません。もし実行しなかった場合は……』」

ノーヴェ「何か恐ろしい事が起こるんだろ？」

チンク「…そう書いてあるな……」

スカリエツティ「ふむ、中々面白そうなルールだね。ウーノ、遠慮はせずに」

きなさい、そう言いかけたとき、トーレがマスを見て言った

トーレ「ちょっとまで、まだ何か書いてあるぞ」

ユウト「このすぐろく、そういうの多くね?」

トーレ「なにになに……?ただし、釘金属バットを使うこと。……だと」

スカリエツティ「ええええええええええ!??」

ウーノ「釘金属バット!??」

ユウト「んなもん持ってねえぞ」

チンク「!、すぐろくから何か出てくるぞ!??」

ノートが光出した。光が収まると次の瞬間、ゴトリと重い音がして現れたのは、巨大な釘金属バット。

ユウト「こりゃあまた、随分と立派な釘金属バットだな……」

ノーヴェ「なんだ?どついう事だよ!」

トーレ「遊び方には……」このすぐろくは、マスに書いてあることを実現させるために、ない物を出して、出来そうもないことをやらせてくれます』…と書いてある」

ウェンディ「この釘金属バットもよくできてるっスね」

ノーヴェ「とりあえず、マスのいう通りにして早く先に進もうぜ?」

ノーヴェが急かす

ウーノ「え、ええ……でも……」

スカリエツティ「しかし、実行しないと恐ろしい事になるのだろうか？私の娘が恐ろしい目に合うのは嫌だからね。ウーノ、遠慮せずになさい」

ウーノ「ドクター……分かりました。それでは行きます」

ウーノは大きく息を吸い込み、釘金属バットを振りかぶった

ウーノ「てめえの笑い方気持ち悪いんじゃないやあー！ー！！」
バキィ！！

スカリエツティ「うおおおおおおお！」
叫びと共に釘金属バットを振り、スカリエツティを打った。

セイン「うわあ…凄く痛そう」

ユウト「つか、血も出てるぞ」

スカリエツティ「うおおおおおおお！」

チンク「なるほど……チュートハンパというのは個人の認識の差があるものなのか」

トーレ「ああ、これからは気をつけよう」

ウーノ「次はドクターの番ですよ」

スカリエッティ「わ、私か…？ちよつと…今は血が…凄く痛くて…」

ウーノ「順番は順番です」

セイン「ウー姉…、そんなキャラだったっけ？」

ウエンディ「鬼が…鬼がいるっス」

ウーノ「早くしてください」

スカリエッティ「わ、分かった…それ」

スカリエッティがサイコロを振る

セイン「ー！」

スカリエッティ「えつと…何も書いて無いね」

それから、トーレ、セイン、チンク、ウエンディがサイコロを振る
つたが、みんな何も書かれていないマスに止まった。

ユウト「どうなってんだ？」

セイン「遊び方には…」このすぐろくは非常に危険を伴うので、ほとんどはただの白いマスになっていきます、ちなみに、指示マスは六マスごとにあります』なんだ、そうだったんだ」

ユウト「ま、スカリエッティのは災難ってことか」

ノーヴェ「さて、次はあたしだな…それ!…うわ!」

ウエンディ「指示マスに止まったっス」

ノーヴェ「えーと…指示は…『逆立ちしながら鼻の下を舐め、自分の足の裏を人差し指でいじりながら回りなさい』できるかあああああああああ!!」

チンク「しかし、実行しないと恐ろしいことに…」

ノーヴェ「いや、これが出る奴の方が恐ろしいわ!」

トーレ「ノーヴェの言う通りだな……」

指示を実行出来なければ恐ろしいことになる。そして実行出来なかった。

スカリエッティ「指示を実行出来なかった、ということは…」

ウエンディ「恐ろしいことが……」

スカリエッティ「しかし、一体どんな恐ろしい事が…今の所は何も変化は……ふふふ」

ユウト「何だよスカリエッティ、急に気色悪い笑い……ぷぷっ!」

トーレ「くくっ!」

セイン「なっ、なにこれ?あはははっ!」

チンク「か、体の奥から…くふふっ!」

ウエンディ「くすぐつたいものがっ…あはははっ！」

スカリエッティを筆頭に、みんなが笑い始めた。

ユウト「まさか、これが…おそ、恐ろしつぶつぶっ！だ、駄目だたえらんねえっ、つぶつぶ！」

ウエンディ「あははは！ウー姉！こうなったら早くあがるしかないっス！」

ウーノ「あがれば、このくすぐつたさは、なく、なるのっ？かしらつぶつぶ！」

セイン「多分、あははは！」

ユウト「おっ！少しくすぐつたさがひいた！今だ、早くサイコロを！」

ウーノ「サイコロが多ければ早くあがれるかしら？」

ノーヴェ「ウーノ姉、五つだ！五個使って一気にあがっちゃまおう」

ウーノ「分かったわ、それ！」

スカリエッティ「…よし！白いマスだ」

トーレ「そういえばこのすぐろく、後どのくらいマスがあるんだ？」

チンク「ちよつと待て…！？後約400マスあるぞ！」

ユウト「まだそんなあんのかよ！？馬鹿なんじゃねーのか、このす

「ごろく！」

ノーヴェ、「とにかく、全員でサイコロ振りまくって早く終わらせるぞ！」

全員『応！！』

笑う門には福来る……このすごろくを終わらせるのに、約半日かかったか

「……………このすごろく『ちよう』は、正式名称をすごろく『超』^{じょう}といい、指示マスの指示が、普通のすごろくの指示マスの指示を超越した物で、ロストロギアと同等の力をもつすごろくだ。このすごろくは、毎年正月になると、何処かの家に現れ、正月が終わると消え、また来年の正月になると、何処かの家に現れるのであった。

ちなみにクアットロは、クラナガンに福袋を買いに行っていて、突然、体がくすぐったくなり、笑いそうになったとか……………

クアットロ「ふふふつ、なにかしらあ？この体の奥から来るくすぐったさは？」

番外編…すぐろくで一番乗りつてときに『ふりだしにもどる』のはよくあるじゃないか
次回からはいつも通りに戻ります。
次回、派手な必殺技が強いとは限らない レヴァンティン 『次回は
私の出番だな』

ぱっと見、派手な必殺技を見て」「おっ強そう」「と思ってると思ったらはたいして強く無

今回、優斗の技が増えます

…もう、話がどこに向かっているか作者も分からなくなってきた

ぱつと見、派手な必殺技を見て「おつ強そう」と思っていると実はたいして強く無い
いきなりだが、俺は今、トーレと模擬戦をしている。

事の始まりは数十分前……

――――

俺は朝飯を食べた後、することも特になかったため、自分の部屋でゴロゴロしていた。

ユウト「さて、今日は何すっかな？」

レヴァンティン『外出許可をもらって街に行くのはどうだ？』

ユウト「そーだな、前に渡した携帯も返してもらわないと」

俺は部屋を出てスカリエツティの所へ向かった。

ユウト「よう、スカリエツティ。前に渡した携帯は？」

スカリエツティ「ああ、今渡すよ」

俺はスカリエツティから携帯を受け取った

スカリエツティ「その携帯で、私やナンバーズと通信出来るように改造したよ」

俺は携帯をいじり、モニターを出したりした。

ユウト「えーと…おっ、こりゃすげえ」

スカリエッティ「後、君の事をトーレが捜してたよ。」

ユウト「トーレが？」

スカリエッティ「彼女は訓練所で待ってるよ。何でも…」

トーレ『前に闘った時はお互いに素手だったが、今度は剣を使うお前と本気の勝負がしたい』

スカリエッティ「…って言っていたよ」

スカリエッティからそのことを聞いた優斗は

ユウト「…そうだな、俺も一度、自分の実力を知るのに良いかもな」

優斗は続けて言う

ユウト「それに、俺達は管理局と敵対関係にあるんだろ？管理局の連中と闘う時の為に、必殺技を覚える必要もあるだろ？」

レヴァンティン『なら、訓練所に行くか？』

ユウト「ああ」

ユウトはスカリエッティの研究室を出て、訓練所に向かった。

訓練所に来ると、中でトーレが待っていた。訓練所の外にノーヴェとチンクがいて、優斗に話しかけてきた。

ノーヴェ「ユウト、お前、本気のトーレ姉は凄く強いけど大丈夫なのか？」

チンク「ああ、トーレは我々戦闘機人の中でも一番の実力を持っているからな」

二人が優斗の事を心配する。それだけ、本気のトーレは強いという事だ

ユウト「何、大丈夫だったの。別に殺し合うわけじゃないんだ」

レヴァンティン「優斗は自分の実力を知るために、そして、管理局と闘うするためにトーレに稽古をつけて貰うだけだ」

ユウト「そーいう事だ。ま、どうせなら新しい必殺技も身につけたいしな」

そういつて、優斗は訓練所に入って行った。

トーレ「…来たな、待っていたぞ、優斗」

ユウト「わりい、待たせたな」

トーレ「なに、一度、本気のお前と闘ってみたかったからな」

ユウト「そうか、言っておくが、手加減しねえぞ」

トーレ「ああ、そのかわり、こちらインヒューレントスキルも本気で行くぞ。ISインヒューレントスキルも使わせ
てもらおう」

ユウト「よし、行くぞ、レヴァンティン」

レヴァンティン『ああ!』

優斗の持っている赤い石から、優斗の左手にレヴァンティンが出てくる。

トーレ「よし、…チンク！開始の合図を頼む！」

チンクが開始の合図を告げる。

チンク「よし、それでは…始め!」

チンクの合図と同時に、二人が動き出した。

THE WHEEL
OF
FATE IS TURNING

そして冒頭に至る

回想している間にも、トーレと攻撃と防御を繰り返している。

しかし…トーレのIS『ライドインパルス』って早過ぎるだろ！一瞬姿が消えるんだぞ！

しかし、俺はそれをヒントに新しい必殺技を編み出した。

疾風のごとき素早さで相手に突進し、強力な突きを繰り返す

『疾風突き』

また、空中からの攻撃には、上昇しながら相手を切り上げる

『インフェルノディバイダー』

ちなみにこの技は、切り上げた相手をアッパーで追撃し、さらに相手を殴り飛ばしたり、踵落として相手を叩き落とす、言うなれば対空技である。

もちろん、対空目的でなくても問題なく使える。

そして、この闘いも決着の時が近付いてきた。

トーレ「ハア…ハア…中々…やるな…」

ユウト「ハア…ハア…そういう…お前こそ…」

二人は息を切らしながら言う

トーレ「ハア…ハア…お互い…後一撃が…限界だろう…」

ユウト「なら…」

ユウト・トーレ「次の一撃で決着をつける」

トーレ「行くぞ…!!」ライドインパルス『!』

ユウト「行くぞ…!レヴァンティン!」

レヴァンティン『ああ!最後に新技を見せてやるっ!』

ユウト「カーネージ!」

二人は猛烈な勢いで近付き合う、そして…

トーレ「はああああああ!」

ユウト「『シザー!』」

二人は最後の一撃を繰り出した。

技解説：優斗の超必殺技^{ディストーションドライブ}『カーネージシザー』

相手に素早く突進し、剣を振り下ろす攻撃。剣を振り下ろした後、ゴルフスイングのように剣を振り上げ、黒いオーラと共に相手を吹き飛ばす。

ユウト「ハア…ハア…、俺の勝ち…みてえだな」

トーレ「ハア…ハア…、ああ、お前の勝ちだ」

—————

ノーヴェ「すげえ…、本気のトーレ姉に勝ちやがった」

チンク「ああ…」

二人は驚いている。

トーレはナンバーズの中で最も強い。しかも、本気のトーレに優斗が勝ったからだ。

二人は優斗達の所に向かう

ノーヴェ「大丈夫か？トーレ姉？」

チンク「立てるか？優斗？」

優斗とトーレは地面に倒れている。

二人は地面に倒れている二人に声をかけた。

トーレ「ああ、大丈夫だ」

トーレは立ち上がる

ユウト「うあー、マジで疲れた…」

優斗は少しふらつきながら立つ。

四人は、訓練所を出た。勝負は、ギリギリで優斗の勝ちだった

—————

その日の夜

優斗の部屋のドアを叩く音がした

ユウト「どつぞ」

ドアを開け、入って来たのはチンクだった。

ユウト「ん？どうした？」

チンク「ああ…怪我、大丈夫か？」

ユウト「あ、ああ、大丈夫だ」

チンク「そうか、ならよかった」

ユウト「？、ああ？」

チンク「なあ、優斗。明日は何か用事はあるのか？」

ユウト「用事…特にないな」

チンク「そうか…。なあ、明日、暇なら私と何処かに行かないか？」

ユウト「？、いいけどよ、何かあるのか」

チンク「私は明日は訓練がないからな、それで…」

ユウト「暇だから俺が暇なら一緒に行こうってわけか。良いぜ、そんなら…街にでも行くか」

チンク「ああ」

—————

優斗の部屋の外で、聞き耳を立てている二つの人影があった

セイン「…聞こえた？」

ウエンディ「聞こえたっス」

セイン「これって…」

ウエンディ「デート(…)の約束っスよね…」

セイン「…ねえ、ウエンディ」

ウエンディ「分かってるっス」

セイン・ウエンディ「二人のデートを着けて行くようよ（っス）」
面白そうだから、という理由で二人を尾行することを決めた二人だ
った。

セイン「しかし、あのチンク姉が…」

ウエンディ「でも、よく話してたりしたから…」

セイン「もしかすると…」

この時、彼らはまだ知らなかった

この次の日から、物語が始まる事を

そして、その物語は

本来の物語と違う未来を進む事を

ぱっと見、派手な必殺技を見て「おっ強そう」と思ってると実はたいして強く無

次回、優斗とチンクが街に行く。

セインとウエンディはそれにこっさり着いていく。そして、話は

新展開を迎える…

次回、大事な事ほど後になってからやっと思い出す

ユウト「こいつは…子供とケース？」

チンク「そういえば今日だったか…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8263z/>

世界を越えし男と数の子たち

2012年1月2日03時52分発行